1人称の省略：モダリティと授与構文*

長谷川 信子
神田外語大学

日本語では、名詞句が頻繁に省略されることがよく知られているが、それは日本語では「主題」を省略することが可能であることに起因すると考えられてきた。本論文では、1人称の省略は「主題」の省略では説明のつかない別のプロセスがあること、1人称は主語と目的語では省略の引き金となる要因および構造が異なること、補文における一人称の省略は補文のタイプにより異なることを示し、1人称省略現象に関し記述的一般化を提示すると共に、統語構造の観点からの分析を提示する。すなわち、主文のCPシステムには、主題と関わるTopicの他に1人称の省略を可能にする機能範疇（便宜的に、Modality Phrase: ModP）が存在すること、1人称の目的語の省略には、*v*Pにクレルに代表される授与動詞のような機能範疇が関わることを主張し、そうした機能範疇(phase)間の局所的な関係により1人称の省略現象が統語的に説明できることを示す。

1. はじめに

日本語は、英語などの言語に比し、省略が非常に多いことがよく指摘される。例えば、(1)で見られるような現象である。[1]

---

* 本稿は長谷川(2004)に理論的な分析と考察を加え、2006年2月12日に神田外語大学CLSワークショップ『日本語の主文現象と統語理論』にて発表したものの一部である。紙幅の都合上、補文内での省略現象については十分な論考が叶わなかったが、それは別の稿に譲りたい。本論文の内容に関し、ワークショップ参加者から貴重なコメントをいただいた。ここに感謝したい。

[1] 以下ではφは省略された位置を示す。省略要素φに関しては、理論的には、(i)音声だけでなく統語的なカテゴリーを含めた省略；(ii)音声はないが統語的には語彙代名詞同様、人称や数などの素性を持つカテゴリー；(iii)移動の後に残された痕跡、の3つの可能性がある。(i)は、多くの理論が採用しているように、項構造が文の基本的な論理的意味を決定するとの仮説の元では採用できない。本論文では、φは(ii)もしくは(iii)と分析するが、表記はφを用いる。

(1) a. {彼は／φ} もう起きてるよ。

a'. {He / * φ} has already been up.

b. 花子が {それを／φ} 買った。

b'. Hanako bought {it/* φ}.

c. {私は／φ} {それを／φ} {そこに／φ} 置いた。

c'. {I/* φ} put {it/* φ} {there/* φ}. (長谷川 1995)

日本語では、主語や目的語といった項であっても、また、英語などの言語では語彙代名詞が不可欠な場合でも、省略が可能である。しかし、省略(φ)は発話状況から復元可能なら常に可能というわけでなない。(2)で示されるように、(何か、誰か、を含め) 不定の名詞句は省略できない。

(2) a. (デパートの袋を抱えて帰ってきた娘に母親が、)

「{何か／* φ} 買ってきたの？」

a'. *何かは買ってきたの？

b. (客用の湯呑み茶碗が使われたことに気付いて)

「あれ、{誰か／人が／* φ} 来たの？」

b'. * {誰かは／人は} 来たの？ (長谷川 1995)

一般に、不定の名詞句はハ格を伴って主題とはなれないことから、日本語で省略されるのは、与えられた段落、文脈、状況などで「主題」となることができる要素と考えられている。すなわち、(1)で観察されたφは、主題化された「主題」が省略されるとするのである (主題省略の仮説)。さらに、この仮説は、省略が (i)会話体では文章に比べ頻繁に起き、(ii)「話し手」(1人称) や「聞き手」(2人称) を指すことが多い、といった事実の説明にも寄与していると考えられている。(cf. 久野 1973, 1978)

こうした「通説」に対し、本論文では、先ず、第2節で、「主題省略の仮説」は少なくとも1人称にはあてはまらず、1人称の省略は、「主題の省略」とは別の現象であることを示し、その現象を、話者と関わる機能範疇、モダリティ (Mod) との関係で説明する分析を提示する。第3節では、目的語に

１人称要素を生成させるにはクレルのような述語が必要であることを示し、それも *v*P における一つの機能範疇と考え、それが上部の機能範疇 ModP と関わることにより１人称目的語の省略が可能となるとの分析を提示する。すなわち、１人称の省略には ModP および *v*P という機能範疇が関わっているとの提案である。こうした機能範疇は、最近の理論の枠組みでは、phase を形成し、統語構造と操作に関し重要な役割を担うと考えられているが（Chomsky 2001）、ここでの主張は、省略現象もそうした phase と密接に関わる統語プロセスとして分析できることを示すものである。第４節では、補文にみられる１人称の現象を考察し、第２節、第３節で提示した phase 間の局所的な関係性が、補文に見られる１人称とクレルの解釈に説明を与えることを見る。第５節は、まとめであるが、提案された分析は、その発展として、Hasegawa (1984/85)で扱われた補文内の目的語の省略現象についても説明を与えることができることを指摘する。

2.　１人称の省略

省略現象を(3)を例にとって詳しく見ていこう。ここでは、省略された要素は括弧内に示してあるが、それらはハ格を伴う主語要素である。

(3)　a.　(A が、デパートの袋を持ってる太郎を見て、母親に話しかけて)
　　A:「φ買い物に行ったんだね。」　　(φ＝太郎は)

　　b.　(A が散歩から帰った弟に)
　　A:「φそこで花子に会わなかった？」　(φ＝あなたは)

　　c.　(顔を腫らしている A が、「どうしたの？」と問われて)
　　A:「φ花子に殴られちゃったんだ」　(φ＝僕は)

　　d.　(A が、教員室に入ろうとした時、友人に「何しているの？」と問われて)
　　A:「φ先生に呼ばれたんだ。」　　(φ＝私は)

ここで省略されたハ格の主語は、どの人称でも省略の対象となっている。しかし、2.1 では、目的語の省略現象を考察し、そこには人称制限があり、１人称目的語の省略は１人称主語の省略とは異なることを示す。

2.1　主語 vs. 目的語

先ず、上記の(3c)(3d)との対比で、(4)を考察してみよう。

(4)　a.　(顔を腫らしているAが、「どうしたの？」と問われて)
　　A:「花子が｛*φ／僕を｝殴ったんだ。」

　　b.　(Aが、教員室に入ろうとした時、友人に「何しているの？」と問われて)
　　A:「先生が｛*φ／私を｝呼んでるの。」

(3c)(3d)と(4)は共に1人称の省略であるが、主語が省略されている前者が文法的であるのに対し、目的語が省略される(4)は非文法的である。しかし、このことは目的語が一般的に省略を許さないことを示しているわけではない。(5)の文法性が示すように、省略されるのが1人称でなければ、目的語も省略できる。つまり、1人称は主語なら省略できるが、目的語では省略できない。しかし、1人称以外なら、文法関係に関わらず省略の対象となることができるのである。[2]

(5)　a.　(Aが、顔を腫らしている太郎を見た人に、「太郎はどうしたの？」と問われて)
　　A.-1　「｛φ／太郎は｝花子に殴られちゃったんだ」
　　A.-2　「花子が｛φ／太郎を｝殴ったんだ。」

　　b.　(Aが、友人の花子が教員室へ入っていった理由を問われて、)
　　A.-1　「｛φ／花子は｝先生に呼ばれたんだ。」
　　A.-2　「先生が｛φ／花子を｝呼んでるの。」

上記で、省略は「主題」の省略によるとの仮説に触れたが、この仮説が正しいとすると、1人称目的語が省略できないという(4)の事実は、1人称目的語は「主題」となれないことに原因があるとの可能性が考えられる。そして、実際、(6)と(7)の文法性の対比から分かるように、1人称の目的語にハ格を

[2] 以下では［±1人称］という素性を用い、1人称とそれ以外の人称との違いを論じるが、［−1人称］として扱うのは主に3人称である。2人称については、疑問文や命令・依頼文など、1人称とも3人称とも異なる取り扱いが必要と思われる構文があるが、本論文では立ち入らない。

与えて文頭へ移動させた主題文は非文となるのである。

(6) (4)と同じ状況下で、

a. *A:「僕は　花子が殴ったんだ。」

b. *A:「私は　先生が呼んでるの。」

(7) (5)と同じ状況下で、

a. A:「太郎は　花子が殴ったんだ。」

b. A:「花子は　先生が呼んでるの。」

名詞句は、これまで、(1)や(3)などの例で観察されたように、人称の違いに関わらず、ハ格により主題化でき、また、省略が可能であることから、「主題」には人称制限がないと考えられて来た。しかし、(4)〜(7)での観察は、１人称に関する限り、主題化および省略に制限があることを示しており、この事実は、これまでの研究では指摘されて来なかった興味深いものである。

2.2 分析：１人称主語の省略

上記で観察された事実の説明に、以下では、(8)を仮定して論を進めたい。

(8) a. 主題省略と１人称省略は別のプロセスである。

b. 主題は［－１人称］に限られ、１人称のハ格、および省略には、［+１人称］と関わる主題(Topic)とは別の機能範疇、以下では便宜的にモダリティ(Mod)、が関わる。

c. Topic 句はこれまで広く想定されているように、［－１人称］なら、文法関係に関係なく、その指定部に移動する。（もしくは、談話状況に登録済みの［－１人称］の要素が生成される。）

d. Mod 句には１人称の主語の要素（[+１人称］素性を持つ要素）が移動する。

e. 主文の CP システムには、TopicP と ModP の２つの機能範疇（もしくは、機能範疇素性）が存在し(cf. Rizzi 1997)、その指定部(Topic や Mod の指定部）の要素は省略の対象となる。

この (8)のシステムでは、(3)で観察された省略現象には２種類あり、［－１

人称］の要素が省略されている(3a)(3b)は、(5)同様、主題による省略であるが、［＋１人称］の省略が見られる(3c)(3d)はModの指定部との関わりで省略されたと考えるのである。そして、(4)が許されないのは、(6)から分かるように、［＋１人称］はTopicとは素性が一致しないため主題省略が適用されないことによる。[3] TopicもModも（いわゆる命題以上の陳述を担う部分として）CPシステムを形成し、その指定部の要素は語彙的に存在する場合は、同じハ格を受けるが、そこの要素は省略の対象となるのである。[4]

2.3 Modについて

上記(8e)で述べた主文のCPシステムについて、もう少し考察しよう。ハ格を持つ主題（Topic要素）が（主に）主文に許される範疇であることはよく知られているが、同じハ格をもつModの指定部の要素も同様に主文と関わる範疇と思われる。そして、主文には、従属文とは異なり、発話の語用的機能があり、話し手の視点や判断と関わる要素が生起すると考えられる。上で提案したModは、そうした要素と関わるものと考えたい。[5] 例えば、(9)に見られるように、人の感情や感覚、欲求を表す述語は主文においては１人称としてしか共起しない。こうした現象も、この手の述語がModとの関係（照合）を要求する述語と考えることで解決できそうである。[6]

(9)　{私／*花子／*あなた}は{お腹が痛い／お化けが怖い／車が欲しい}。

---

[3] また、Modは目的語からの移動を許さない。(8)のシステムでは、何故１人称の目的語がModの指定部に移動できないのか（i.e.,何故、Topicのようにどの文法関係の要素も指定部に移動できないのか）についての説明が不十分だが、それについては第３節に譲る。

[4] 日本語において、格と構造の関係は一筋縄ではいかないが、特定の機能範疇が特定の格と関わることはよく知られている。例えば、名詞句（DP）との関わりでノ格、VP内の直接項（目的語）ならヲ格、間接項（間接目的語など）ならニ格、付加詞ならデ格、vP以上の要素はガ格、といったものである。本論文の「ハ格はCPシステムの要素に与えられる」とする考え方は、これらの事実と同様に扱われるものであろう。

[5] 本論文では、ハ格１人称の生起とその省略の観点からModという機能範疇を提案しているが、それが、いわゆるモダリティとして、(9)や(10)での現象も含め、様々な現象全てに関し包括的に扱える範疇であるかどうかは今後検証を要する問題である。ここでは、そうした要素と関わる可能性があることだけを指摘するに留める。

[6] Mod範疇と１人称主語を要求する述語については、本紀要の外崎淑子、および上田由紀子の論文も参照のこと。

また、話者の主観と関わる(10)に見られるような文副詞は Mod と関わると考えることができよう。[7]

(10) a. 驚いたことに、太郎が猫を飼い始めた。
b. 不幸にも、花子は次郎と会うことができなかった。
c. 私は、残念にも、試合に負けてしまいました。

さらに、談話や会話中の要素のうち、何を「主題」として扱うか、には話者の判断が関わってくるわけで、Mod (ModP) は、Topic (TopP) の上位に位置する機能範疇であると思われる。つまり主文においては、ModP と TopP が、統語構造上は CP システム (cf. Rizzi 1997) を構成しており、それらが発話・語用的機能を保証すると考えるのである。上記の現象も含め、Mod の統語的機能について、より注意深い考察が必要だが、本論文で扱う１人称の省略というかなり限られた現象の観点からだけでも、この範疇の存在の必要性は認められると思う。

3. 目的語と授与動詞クレル

2.2 の(8)で提案したシステムは、(3c)(3d)と(4)、(4)(6)と(5)(7)の文法性の対比に注目していることから、当然、日本語では、１人称目的語は「主題」になることもできず、省略もできないことを予測する。実際、(4)だけでなく、(11)の間接目的語でも同様の［±１人称］による文法性の違いが観察できる。

(11) a. A: 花子もそのことを知っているんだね。
B1: ええ、太郎が {彼女$_i$に／ϕ_i} 教えたの／伝えたの。
B2: ええ、彼女には 太郎が 教えたの／伝えたの／知らせたの。

---

[7] 副詞は、以下に示すように、それを認可する範疇により、構造的にも意味・機能的にも異なると考えられており、(10)の話者の主観的判断と関わる副詞は CP（ここでは ModP）範疇と関わると考えられる。

(i) 副詞と機能範疇 (Travis 1988, Cinque 1999, etc.)
a. 文副詞(CP)：幸運にも、不思議なことに、etc.；明らかに（話者の主観）
b. 時の副詞 (TP)：しばしば、時として、いつも、etc.
c. 主語修飾の副詞 (TP or vP)：わざと、賢明にも、etc.
d. 様態の副詞(VP)：素早く、手際よく、完璧に、etc.

b. A: あなたもそのこと知っているんですね。

B1: *ええ、太郎が {私$_i$に／ϕ_i} 教えたの／伝えたの。

B2: *ええ、私には　太郎が　教えたの／伝えたの／知らせたの。

しかし、例文(11b)の間接目的語の場合、[+1人称] に対する制限が(4)より更に厳密である。つまり、B1 の非文法性から分かるように、目的語の1人称は省略できないばかりか、語彙的代名詞の「私」の存在さえも許さない。これと同様の現象が、(12)の目的語にも見て取れる。

(12) a. (太郎がパーティーに来ているのに気がついて)

A: 太郎$_i$も来ているね。

B1: 花子が {彼$_i$を／ϕ_i} 招待したのです。

B2: 彼$_i$は 花子が 招待したのです。

b. A: あなた$_i$もこのパーティーに来てたのですね。

B1: *ええ、花子が {私$_i$を／ϕ_i} 招待したのです。

B2: *ええ、私$_i$は 花子が招待したんです。

上記の事実は、1人称の（間接）目的語が、「私」であろうが「ϕ」であろうが一切許されないというわけではない。このタイプの述語は、クレルやクルのような、久野(1978)で扱われている「話者の共感が（間接）目的語にあることを示す述語」と共起すれば、（間接）目的語に1人称名詞句を取ることができる。

(13) a. (11b)のB1の代わりに、

B3: ええ、太郎が {私$_i$に／ϕ_i} {教えて／伝えて／知らせて} {クレタ／キタ} の。

b. (12b)のB1の代わりに、

B3: ええ、花子が {私$_i$を／ϕ_i} 招待してクレタんです。

すなわち、「教える」「伝える」「招待する」など、出来事に（抽象的な）方向が伴い、（間接）目的語が主語の行為者の行為の恩恵を受ける受け手となるタイプの述語は、1人称の目的語を取る際には、クレルやクルのような「目

的語共感述語」（以下では、それらの代表として「クレル」を用いる）を必要とするのである。[8]

このことは、1人称の（間接）目的語（以下では、間接目的語も含め、「目的語」とする）の認可には、クレルのような述語が必要であることを示しており、(13)に見られる省略は、その存在により可能となると考えられよう。すなわち、1人称は、それが主語なら、(8d/e)で提案されたModにより省略でき、目的語なら、クレルやクルの述語の存在により省略できるのである。

3.1 分析：1人称目的語の省略

上記で観察された1人称の省略を、(8)の提案に、クレル・クルなどの述語の機能を加え、統語理論の観点から考えてみよう。第2節、ことに(8)で提案されたのは、主文の CP に関わる機能範疇として［+1人称］の素性を持つ Mod という範疇があり、その範疇と関わることで1人称の省略が可能となることであった。その関わりとは、主語の場合は、Mod の指定部に移動することである。また、上記 3.1 で観察したのは、特定のタイプの述語では、1人称が目的語として生起するためには、「話者」（すなわち1人称）の共感や視点と関わる述語クレルが必要であり、それと関連することにより、省略も可能になるという事実である。

この一般化は、現象の記述としては十分であるが、1人称の省略には、主語の場合と目的語の場合で全く異なるプロセスが存在することになり、省略現象として統一的に説明するものとしては不十分である。ここでは、日本語の省略は、「主題」の省略を含め、主文の CP システムとの関連（i.e.,(8e)の提案）からのみ可能であるとの方向性を追求し、省略全般を統一的に説明する方法を探りたい。すなわち、クレルを介在した目的語の省略においても最終的には Mod との関わりによって省略が起こると考えるのである。

一般に、CP システムを含め文の上位構造を形成する機能範疇は、文中の要素が、その指定部、もしくは、その主要部と一致することによって、その機能を全うする（cf. Rizzi 1997, Hasegawa 2005, Alexiadou and

---

8 クレル・クルなどを必要とする述語には、他に、「（電話を）かける」「送る」「助ける」などがある。また「寄こす」はそれのみで目的語共感述語である。久野(1978)参照。

Anagnostopoulou 1998 など)。例えば、疑問詞疑問文の機能は、(英語などの言語のように) CP 指定部へ疑問詞が移動すること、もしくは (日本語などの言語のように) 主要部 C に疑問符が生起することにより、統語的に表示される。この考えを Mod に採用すると、主文の Mod 機能も、Mod の指定部、もしくは、Mod の主要部との関わりにより、統語的に明示される筈である。Mod 指定部との関わりはハ格主語の生起として表れることを既に見てきた。そして、Mod 主要部との関わりについては、クレルの存在が Mod の機能の統語的明示として働く、言い換えれば、クレルが Mod へ移動することにより統語的に明示される、と考えたい。[9] つまり、クレルの存在は [+1人称] の素性を持つ Mod の統語的具現の一つの手段なのである。さらに、クレルという述語も *v*P 辺りの機能範疇であると考えれば、目的語は、その指定部への移動により認可すると分析でき、結果として、クレルを介在して Mod と関わることになり、その省略も Mod の存在に依存するということになる。すなわち、省略は主文の CP システムと関わることで可能となるのである。つまり、省略は文最上位の機能範疇システム CP により可能となるのであるが、その下の機能範疇である *v*P システムとは主要部同士として関連していると考えるのである。

ちなみに、CP と *v*P という機能範疇は、最近の統語理論において、phase として、統語構造上も意味解釈上も最も基本的かつ重要な機能を担う範疇と考えられており、*v*P は項構造を含め述語論理の「命題」が表出されるレベルであり、CP は「命題」に陳述・発話機能を持たせるレベルと思われる。[10] (cf., Chomsky 2001) ここで提案したクレル (*v*P レベル) が ModP と関連するとのプロセスは、隣接した phase 同士の関係性であり、統語現象では最も基本的な局所的な関連性である。

さらに、この CP (ModP) と *v*P の局所的関係性に着目すると、注 3 で指摘した、なぜ Mod の指定部への移動が主語からしか起こらないのかという

---

[9] 機能範疇の主要部の統語的明示は、疑問符などのような特定要素による場合に加え、動詞要素が (可視的、もしくは不可視的に) 移動してくることによる場合があることは、すでに、Alexiadou and Anagnostopoulou 1998 や Ueda 2002 などで論じられている。Hasegawa 2005 も参照。

[10] Phase の機能と理論的位置づけについては、本紀要の筆者の巻頭論文も参照されたい。

疑問に説明を与えることができる。すなわち、Modは［+1人称］の素性を持つわけだが、その素性は隣接したphase要素により満足させられなければならないと考えるのである。そうだとすると、その候補は、*v*P 主要部としてのクレルか、もしくは、*v*P の指定部にある1人称の主語か、ということになり、主語より離れている目的語などの要素はModの指定部へは移動できないのである。

ここでの提案を(14)にまとめておく。

(14) 提案

a. 主文のCPシステムには2種類の機能範疇、TopPとModP、が含まれ、それらを含めて一つのphaseが形成される。(cf. Rizzi 1997)

b. 機能範疇の機能は、統語的には指定部もしくは主要部に具現する。

(i) Topは［－1人称］:［－1人称］要素により指定部に具現

(ii) Modは［＋1人称］: Modから近い要素（機能範疇）との［＋1人称］の一致 → (a) *v*P-指定部の要素（主語）の Mod-指定部への移動 ; (b) *v*P-主要部（クレル）の移動

c. 省略 : Topとの一致要素（主題省略）、Modとの一致要素（1人称の省略）→ CP システム（phase）により認可された要素が省略の対象となる

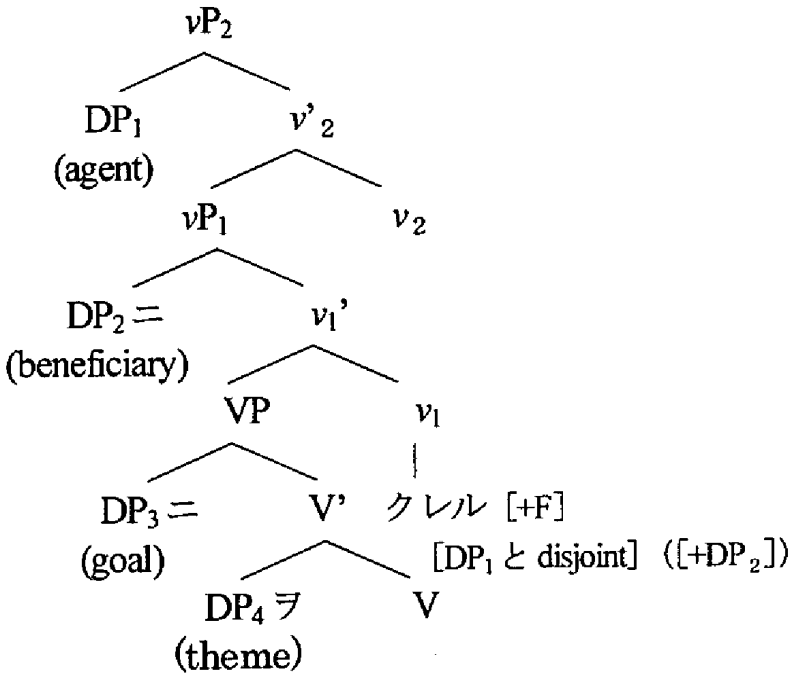
d. クレルは局所的に上部のphaseとの関連を必要とする : この特性を、便宜的に［+F］素性とする。

また、クレルは、(15)のような構造を持ち、(14)での提案とも関係し、vP_1とvP_2合わせて一つのphaseを形成すると考える。クレルに与えた［+F］素性は、(14d)にも記したが、上部のphaseとの関連を保証する素性であり、主文の場合はModと関わる。[11] また、クレルの指定部DP_2へは、目的語と

[11] ［+F］は常に主文のModとの関係を保証するわけではなく、それと最も近いphaseとの関係を要求するのである。次節で扱うが、クレルが補文中にある場合、［+F］は、補文中にModがあれば、それと、Modの存在しない場合は、その上の文の最初のphase（*v*P要素）との関係を要求する。

なる DP_3 や DP_4 が移動でき、それが、クレルの場合は授与動詞の一般的意味機能として、DP_2 (beneficiary) および [+F] 素性と一致した要素への恩恵を表す。[12]

(15) クレルの構造 (cf. 長谷川 2000, 2004; Shibatani 1994)



ここで提案したクレルを含め Mod による省略は、どの言語でも見られるという現象ではないことから、言語習得の過程においてパラメターとして学ばれなければならないものであろう。日本語においては、どういう述語がクレルのような機能 (i.e., [+F] 素性) を持ち上位の Mod などの機能範疇との関係性を要求するのか、また、言語一般においては、どういう条件下で Mod による省略が可能となるのか、等が習得の段階で決定されていかなければならない。具体的には、日本語を習得中の子供は(16)のような間違いをすることが知られているが、クレルとは異なった共感の指向性を持つ「あげ

[12] クレルは目的語指向の視点・共感を表す述語 (すなわち、「私が花子に本を買ってクレタ」は非文) であることから、クレルとの照合は主語の DP_1 と同一となってはならない。つまり、クレルはその主要部素性としての [+F] により、上位の機能範疇 (ここでは [+1人称] Mod) と関わるわけであるが、その指定部の DP_2 は [+1人称] とはなれないわけで、クレルの主要部素性と指定部素性の間には disjoint の条件が必要である。その条件が、クレルの主語となる DP_1 は [+F] により与えられる素性とは異ならなくてはならないこと、つまり、主文での DP_1 は1人称であってはならないことを保証するのである。

る」も、また「ぶつ」のようなクレルを必要としない述語も全て［+F］の述語と捉え、１人称の目的語の省略を許していると思われる。[13]

(16) a.　(オモチャを持っている子供に)

A:　「いいオモチャね。どうしたの？」

B:　「お父さんが、あげたの」(＝お父さんが（僕に）くれたの)

b.　(泣いている子供に)

A:　「どうしたの？」

B:　「花子ちゃんが、ぶったー」(cf.　大人の会話の(5a)は*)

また、英語などの一般的に省略が限られている言語においても、日記文やくだけた手紙やメモなどにおいては、(17)のように、１人称主語が省略できることが知られており、Mod による省略は、日本語に限らず、他言語でも文体や会話状況などにより可能となる場合があると思われる。

(17)　(I) Met Mary at the coffee shop.　(I) Took the train at 5.　(I was) Glad to get back home before 7.

4.　補文中の１人称

上記では、主文における１人称の振る舞いを、主文の Mod とクレルの観点から分析した。以下では、補文中に見られる１人称について考察する。上記の(11)や(13)の例文では、「伝える」「招待する」といった行為が目的語への恩恵を示唆する述語は、その目的語に１人称を取る場合はクレルが必要であることを見てきた。しかし、(18)(19)を観察すると、その条件が補文中では、補文のタイプの違いにより、随意的になる場合と全く適用されない場合とがあることが分かる。

---

[13] もしくは、日本語の場合「主題による省略」があるため、１人称も含め主題として捉えている可能性もあろう。全ての述語を［+F］と捉えるか、主題省略を１人称にも適用させるか、いずれにしても、省略の過剰一般化があるわけで、それをより特定化されたシステムへ移行する過程がどのように行われるか、その過程がここで提示したシステムと整合性があるか、などについては、今後の検討課題としたい。

(18) a. 道子は［太郎が私を｛助けた／助けてくれた｝］ことに 感激した。

b. 太郎は［彼が私にそれを｛伝えた／伝えてくれた｝］ことを すっかり忘れている。

c. ［花子が私を｛招待した／招待してくれた｝］ことは、秘密です。

(19) a. 太郎は［彼が私にそれを｛伝えた／*伝えてくれた｝と］思っている。

b. 次郎は［道子がそのパーティーに私を｛招待した／?招待してくれた｝と］勘違いしている。

(18)の補文はコト節、(19)はト節の例であるが、クレルは、コト節では随意的だが、ト節では許されない。さらに、コト節においても、クレルを用いた場合、その恩恵に浴する要素は一概には決定できない。例えば、(18a)では、その恩恵の享受者は話者の「私」とも主文の主語の「道子」とも取れるが、(18b)と(18c)では恩恵は「私」にのみ向けられていよう。また、ト節においては、(19a)ではクレルは使えないが、(19b)では許される可能性がある。しかし、そうであっても、その恩恵は１人称の「私」に向けられるのではなく、主文の主語の「次郎」との関係であろう。要するに、補文中にクレルが生起するとしても、それが主文の時のように、単純に「話者」の共感と関わるのではなく、主文の主語要素と関わる場合が多いのである。

しかし、この事実は、クレルがそれ自身で［+１人称］の素性を持つのではなく、[+F] によりクレルの上位の機能範疇と関わることにより値が決まるとした上記 3.1 で提案したシステムでは、当然予測されることである。つまり、主文の場合、クレルの上位の機能範疇は常に［+１人称］を持つ Mod となるが、補文中のクレルは、その上位の機能範疇として、主文の Mod より下位にある他の機能範疇（主文の phase である *v*P）と関わる可能性が予測されるのである。これが正しいとすると、(18)と(19)に観察されるコト節とト節の違いは、それらの節の機能範疇の構造の違いに帰結できる筈である。そして、コト節とト節には、統語的に系統立った違いがあることが指摘されている。その違いを補文中に CP レベルの機能範疇が存在するか否かの観点から考察してみよう。

4.1 コト節とト節

よく知られていることだが、コト節とト節は、補文中に「主題」となるハ格の名詞が生起できるか否かで異なる。

(20) a. みんなは［太郎｛が／*は｝昨日 LA に発った］ことを忘れている。
　　 b. ［太郎｛が／*は｝昨日 LA に発った］のは 秘密です。

(21) a. 花子は［太郎｛が／は｝昨日 LA に発った］と思っている。
　　 b. 警察が［太郎｛が／は｝昨日 LA に発った］と勘違いしている。

本論文の主張に従えば、ハ格名詞句の生起はその文に CP システムが存在することを示し、ト節にはそれがあるがコト節にはないことになる。さらに、(22)と(23)では１人称主語がハ格を伴うことができるか否かが示されているが、このことは、コト節で３人称のハ格が現れられないこと（TopP が存在しないこと）に加え ModP も存在しないことを示している。

(22) a. みんなは［私｛*は／が｝ベトナムに行った］ことを忘れている。
　　 b. ［私｛*は／が｝ベトナムに行った］ことは秘密です。

(23) a. 母は［私は夏にベトナムへ旅行する］と思っている。
　　 b. 母は［私は昨年もベトナムへ旅行したと］勘違いしている。

上記のの結論は、Uchibori (2000)が、(24)や(25)のような、長距離かき混ぜ移動現象を考察し、移動した要素が補文中の照応詞を束縛できるか否かの可能性の違いから、ト節は phase を形成するが、コト節自身は phase ではない、との結論を導き出しているが、その結論と合致するものである。

(24) a. *お互い$_i$の先生が[校長が[太郎と花子]$_i$を推薦すると]思っている。
　　 b. *お互い$_i$の先生が［校長が[太郎と花子]$_i$を推薦する］ことを期待している。

(25) a. *?[太郎と花子]$_i$を お互い$_i$の先生が［校長が t_i 推薦すると］思っている。

b. ?[太郎と花子]$_i$を お互い$_i$の先生が［校長が t_i 推薦する］ことを期待している。 (Cf. Uchibori 2000)

ト節にはTopP、ModPを含むCPシステムが存在しそれはphaseを形成するが、コト節にはCPシステムが存在せずphaseとはならないのである。

4.2 分析：補文中のクレルの解釈

以下では、補文自身がphaseを成すか否か、また、補文のModPの素性はどのように決定されるか、を考慮した上で、上記(18)(19)で観察された現象の説明を試みる。

上記で、ト節にはModを含めCPシステムが存在することを見た。さて、Modの素性だが、主文のModは［＋１人称］であるが、一般に思考・伝達動詞の補文となるト節は、それ自身での素性は持たず、すぐ上位の phase-主要部から素性を受け継ぐと考えたい。そもそもModとは、主文の場合その発話者の素性を持つのであるから、ト節補文にあっては、ト節（の内容）を思考・伝達する上位文（主文）の主語、すなわち上位文の *v*P-指定部の要素から素性を受け継ぐと考えるのは自然であろう。

さて、クレルであるが、クレルは主文の場合同様、すぐ上位の機能範疇と関わることを保証する［+F］素性を持つ。主文の場合は、すぐ上位の機能範疇は Mod であり、その素性を受けるが、補文中にある場合は、補文にModPが存在するか否かで、関係する上位の機能範疇は異なる。ト節のように補文に ModP が存在すれば、それと関わるが、ModP がなければ、その上の機能範疇、すなわち、上位文（主文）の *v*P-指定部の要素（主語）から素性を受け継ぐのである。ただ、その場合、クレルの目的語志向の特性として、自らの文の主語とはdisjointでなければならないことは、主文の場合と同様である。

上記を踏まえ、(18)と(19)の事実を考察しよう。ここで説明が必要なのは、以下の事実である。

(26) a. 「伝える」「助ける」などの述語は、主文では目的語が１人称の場合はクレルが必要であるのに、何故補文ではクレルが必要ではないのか？

b. コト節では、何故クレルが許され、その恩恵の向く先に「私」が含まれる場合と、主文の主語の場合があるのか？

c. ト節では、クレルは、何故許されない、もしくは許されたとしても「私」に恩恵が向かないのか？

先ず、(26a)だが、「伝える」「助ける」などにはクレルが必要との条件は、目的語がその文の ModP の素性と合致する時のみクレルを介在させなくてはならないと考えたい。[14] すなわち、たとえ「私」が目的語位置に生起しても、その文に Mod が存在しなければ、クレルは必要ないのである。これは、ModP が存在しないコト節ではクレルの存在は随意的であることを説明する。また、クレルが生起しても、コト節では、クレルの［+F］は最も近い主文の機能範疇である *v*P の指定部素性（主文の主語）を指向する。そのため、(18a)では、「道子」への恩恵を表すことができる。しかし、(18b)では、主文の主語の素性は補文の主語と同一であり、それは、目的語指向のクレルが守るべき「自らの主語との disjoint」の条件に反するため、「太郎」への恩恵の読みはない。また、(18c)のように、補文自体が主文の主語として機能している場合は、最も近い機能範疇は主文の ModP となり、クレルの示す恩恵は「話者」となる。これがコト節に見られる現象の基本的な説明である。ただ、もう一つ説明しなくてはならないのは、(26b)で、特に、コト節内のクレルは目的語に「私」がある場合、何故「私」への恩恵の読みが常に可能なのか、という点である。これは、次に述べるト節と決定的に異なる点で、ト節を考察した後に再度扱うことにしたい。

さて、ト節だが、コト節と異なり、補文内に ModP が生起する。ただ、この ModP は上述したように、その人称素性をすぐ上位の機能範疇である主文の *v*P-指定部から受け継ぐ。 例文(19a)だが、目的語に「私」が存在するにもかかわらずクレルが用いられないのは、まさに、補文の Mod の素性が主文の主語の「太郎」の素性を受けているからであり、それと合致していない目的語ではクレルは使えないのである。また、補文のクレルは［+F］によ

[14] この条件を、どのように特定の述語に附記するか、そしてそれをどのレベルで認定するかについては、今後の検討課題としたい。

り補文の Mod 素性を受け継ぐが、それがそもそも主文の主語の「太郎」の素性と一致するために、結果として、補文の主語の「彼」と同一素性を持つこととなり、クレルの主語との disjoint の条件に違反することになり、クレルは許されない。一方、(19b)では、主文の主語と補文の主語が異なるため、クレルの主語との disjoint 条件は満たされており、補文の Mod が持つ人称素性（すなわち、主文の主語である「次郎」）への恩恵の読みは可能となるのである。

さて、先ほどの問題、コト節内のクレルは何故「私」への指向が常に許されるのか、に戻ろう。コト節と違い、ト節内のクレルは「私」への指向が（主文の主語が「私」でない限り）みられない。この相違は明らかに ModP の存在の有無と関わっていよう。そもそも ModP の統語的具現には、指定部によらない場合はクレルのような［+F］の述語が Mod の主要部へ移動すると考えてきた。このことは、クレルの［+F］を満たす方法が、Mod の場合と Mod の存在しない場合とで異なることを示している。クレルのすぐ上位の機能範疇が Mod の場合は、クレルが移動するが、コト節のように主文の *v*P と関わる場合は、移動によるというより、隣接する機能範疇間の一致と考えられよう。そして、その場合、もしクレルの指定部に「私」が生起しているのであれば、随意的に主文の［+１人称］の Mod とも関係が取れると思われる。つまり、主文の［+１人称］Mod は、それ自身と同じ素性も持つ要素を認可する［+F］範疇に対し、それが既により近い Mod へ移動していない限りにおいて、「素性束縛」を起こすと考えたい。[15]

5. まとめと発展

本論文では、１人称の生起と省略に関し、１人称素性を持つ主文の Mod と、その Mod と関わるクレルという、２つの隣り合わせた機能範疇の関係性の観点から、統語的な分析を提示した。また、補文における１人称要素は、補文の構造と密接に連動し、補文自身に Mod が存在するか否かで、クレルの

[15] この主文の［+１人称］Mod による「素性束縛」は phase を越えてなされるわけだが、その厳密なメカニズムについては、今後の課題としたい。

可否とその意味・機能が異なることを観察し、それも、クレルと Mod が持つ機能から説明できることを示した。従来、人称詞の振る舞いとその分析は、欧米語にみられるΦ素性（人称、数、Gender）と TP の派生辞（Tense/Agreement）の関わりで主に考察されてきており、述語との一致が見られないと考えられてきた日本語は、（尊敬語などの現象を除き）そうした考察の対象から外されてきた。しかし、本論文では、日本語には、欧米語とは異なったタイプの人称詞の振る舞いがあり、欧米語が TP 範疇において「一致」を示すのとは異なり、その上の CP カテゴリー（TopP, ModP）範疇との「一致」とも考えられる現象があることを、1人称現象により示すことができたと思う。特に、省略現象に関し、日本語の Null 要素（φ主語、φ目的語）の認可（省略）には phase（*v*P、ModP）の人称素性［±1人称］が関わることを示したが、これは、ロマンス語のゼロ主語（Null-Subject）現象が 機能範疇 T のΦ素性により認可されることと平行して考えられ、Null 要素の認可（または省略）には、それに関わる機能範疇が言語間で異なるとの仮説へと発展できると思われる。

また、本論文では、こうした人称や省略に関わる現象は、*v*P と CP（より具体的には、TopP と ModP）という統語構造構築と統語操作の基本であると考えられている phase、および、隣接する phase 間の関係性、局所性の観点から分析できることを示した。このことは、裏を返せば、語用的な問題として考えられてきた話者の視点や共感とかかわるクレルなどの要素の生起や解釈が、統語部門で扱えることを示しているだけでなく、むしろ、それらは統語部門で扱うことが相応しいものであることを示唆していよう。

5.1 補文中の目的語の省略

ここではこれ以上立ち入れないが、本論文のクレルの分析と補文内での振る舞いは、補文の目的語の省略に関わる以下のパラダイムに本質的な説明を与えるものである。

(27) a. 道子$_j$は［太郎が $\phi_{*i/*j/k}$ 助けた］ことに 感激した。

b. 太郎$_j$は［彼$_j$が $\phi_{*i/*j/k}$ それを伝えた］ことを忘れている。

(28) a. 太郎$_j$は［花子が $\phi_{*i/*j/k}$ 助けたと］思っている。

b. 次郎 $_j$ は［道子がそのパーティーに $\phi_{*i/*j/k}$ 招待したと］勘違いしている。

(29) a. 道子 $_j$ は［太郎が $\phi_{*i/j/k}$ 助けてクレタ］ことに 感激した。

b. 太郎 $_j$ は［彼 $_j$ が $\phi_{*i/j/k}$ それを伝えてクレタ］ことを忘れている。

(30) a. 太郎 $_j$ は［花子が $\phi_{*i/j/k}$ 助けてクレタと］思っている。

b. 次郎 $_j$ は［道子がそのパーティーに $\phi_{*i/j/k}$ 招待してクレタと］勘違いしている。

これらの文で、i は話者、j は主文の主語、k は談話内の「主題」となれる要素を指すが、説明されなければならない事実は、省略された目的語が主文の主語を指すことができるのは、クレルがある場合に限られるという事実である。また、(27)～(30)の ϕ 目的語は「私」を指すことができないのだが、このことは、(18)(19)での語彙代名詞「私」を、たとえクレルが存在したとしても、省略することができないことを示している。これらは、ゼロ代名詞を扱った Hasegawa (1984/85)では未解決なまま残された問題であったが、上記のクレルと Mod の分析を採用すれば、解決できると考えられる。しかし、それについては、稿を改めて論じたい。

参照文献

Alexiadou, Artemis and Elena Anagnostopoulou. 1998. Parameterizing AGR: Word order, V-movement, and EPP checking. *Natural Language and Linguistic Theory* 16: 491-539.

Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase. In M. Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A Life in Language*. 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Hasegawa, Nobuko. 1984/5. On the so-called Zero-Pronouns in Japanese, *The Linguistic Review* 4: 289-342.

長谷川信子. 1995. 「省略された代名詞の解釈」『日本語学』14: 27-34.

長谷川信子. 2000. 「一致現象としての授動詞と謙譲語」平成 11 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告（4）（課題番号 08CE1001）『先端的言語理論の構

築とその多角的な実証(4-A)』31-57. 神田外語大学.

長谷川信子. 2004. 「1人称の省略：統語構造による分析（A Preliminary Analysis)」平成 15 年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)報告書（課題番号 14380119)『テクスト理解と学習—テクストの言語の特徴が理解と記憶に与える効果について—』33-60.神田外語大学.

Hasegawa, Nobuko. 2005. EPP Materialized First, Agree Later: Wh-questions, Subjects and *MO*also'–phrases, *Scientific Approaches to Language*, No.4:33-80. Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies. 神田外語大学、言語科学研究センター.

久野暲. 1973. 『日本文法研究』大修館書店.

久野暲. 1978. 『談話の文法』大修館書店.

Rizzi, Luigi. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In Liliane Haegeman, ed., *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. 281-331. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Shibatani, Masayoshi. 1994. "Benefactive Constructions: A Japanese-Korean Comparative Perspective," *Japanese/Korean Linguistics* 4: 39-74. CSLI Publicatons.

Travis, Lisa. 1988. The Syntax of Adverbs. *McGill Working Papers in Linguistics 20: Special Issue on Comparative Germanic Syntax*, 280-310. Department of Linguistics, McGill University.

Uchibori, Asako. 2000. *The Syntax of Subjunctive Complements: Evidence from Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

Ueda, Yukiko. 2002. *Subject Positions, Ditransitives, and Scope in Minimalist Syntax: A Phase-based Approach*. Ph.D. dissertation, Kanda University of International Studies.

261-0014

千葉市美浜区若葉１－４－１

神田外語大学

言語科学研究科

hasegawa@kanda.kuis.ac.jp